

「異(い)」なるものへの拓け

奨励	小崎 眞【ござき・まこと】
奨励者紹介	同志社女子大学生活科学部准教授 日本キリスト教団正教師

イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。

その名はインマヌエルと呼ばれる。」

この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れ、男の子が生まれるまでマリアと関係することはないかった。そして、その子をイエスと名付けた。

(マタイによる福音書 一章一八―二五節)

はじめに

今日は、大学のアドベント讃美礼拝のときに言葉を取り次ぐ機会を与えられ、心より感謝致します。本務校の同志社女子大学では、本日がクリスマス礼拝でした。実は、お恥ずかしいことですが、同じ時期であったため、今タが大学においてもクリスマス礼拝であると勝手に思い込み、聖書・讃美歌を選んで報告しておりました。「おお～やばい、アドベント礼拝じゃないか」と気づいたときはすでに遅かったです。しかし、聖書は素晴らしい書物であり、このインマヌエルのお話は、クリスマスにもクリスマスを持ち望むこの時期にあっても、私たちに深い問いを投げかけてきます。そこで、今日は「『見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。』この名は、『神は我々と共におられる』という意味である」とのマタイの伝承から、アドベントにあたり、「神が共にいる」とはどういうことであるのか、探りたく思います。

「神と共に」って?!

私は牧師の家庭に育ちました。アドベントのこの時期は、何となく教会が活発になり、教会の皆さんが行うクリスマス会のおこぼれにあずかれる素敵なきときでもありました。幼いときに、こんなことがありました。私は教会の横に併設されている牧師館という場所に住んでいたのですが、母親から、教会の冷蔵庫に入っているクリスマス会の残りのケーキを取ってくるよう頼まれました。夕食後のことでした。教会は真っ暗。私は怖くて、怖くて、ドキドキしながら教会の台所へ向かいました。その道のりの長いこと。そんなときに限って、なぜか物音がしたりする。「ガタッ」と。飛び上がる思いで、「神さま・・・助けてっ」と心のなかで叫ぶ、いや、祈るわけです。些細な音がする度に「神様のうそつき」とか、「いや違います、いい子にしますから助けてください」とか、「お守りください」とか念ずるのです。「神が共にいる」とは、このような都合の良いことを指しているのでしょうか。自分の勝手な思いのなかで、神を自分に引き寄せることを指しているのでしょうか。

仕方ない

さて、二〇一一年三月十一日、私たちの国は、この世に神がいるのかと疑うほどの悲惨な出来事に遭遇しました。あの大地震から約九ヵ月経過してしまいました。厳しい冬を前にやり切れない現実押し潰されそうな人びとがまだまだ沢山いることも事実です。この夏、あの岩手県大船渡市に在住するカトリック信者の医師・山浦玄嗣さんのお話を伺う機会がありました。ケセン語の聖書翻訳で有名な方です。最近はお水くぐりの聖書」といって震災のなかで流出しなかった聖書が注目を集めています、ご自身も震災のなかで何とか生き延びたとのことでした。

山浦さんの所に東京のメディア関連の人たちが取材に訪れるそうです。彼(彼女)らは東京から現地に足を運び入れ、取材した後、必ず山浦さんに質問するそうです。「忍耐強く、地道に生きている東北の人たちの所になぜ・・・こんな酷い出来事が。罪もない人たちが、なぜ犠牲に・・・」と。何度となく同じ質問を浴びた山浦さんは、そのような人たちに対して、

「地震は起こるんやっ、天災は起こるものやっ、仕方ない」と最後に言い返すそうです。

さて、メディアの人たちの思いと山浦さんの思いは何か違うのでしょうか。先のメディアの人たちの発言の背後には応報主義的価値観が潜んでいるように思います。すなわち、自分たちの努力や業績に呼応して恵みや罰が与えられるという発想が前提となっています。そして、天災すら、そのような人間の努力や人間の資質に呼応させ判断を下そうとしています。ゆえに、「東北の人たちは〇〇してないのに、こんな被害が・・・」とか、「〇〇したから、罰として、こうなった」とか、「〇〇したから、成功できた、一方、〇〇してきたのに、なぜ、こんなことばかり」といった形で、自らの働きのなかに原因を尋ね、あらゆることをその原因に還元させて納得しようとしします。その姿勢は、ときに、受験の神のお陰で合格できたとか、縁結びの神のお陰で良縁に恵まれたという発想を無批判に許容します。「神さまがついていたから、神と一緒にだから大丈夫」と語り、神ですら、自分たちの都合に合わせて利用し、自分たちの心情に引き寄せ「神」を処理します。結果的に、この姿勢は私たちの築いてきた世界観、足跡を絶対化することを導きます。

一方、山浦さんの発言は、メディアの人たちと根本的に異なる視座に立っています。彼の語る「仕方ない」との表現は、現実の前に茫然自失となり諦めのなかに身を放置することではなく、人間が自らの力の及ばない世界へ対峙する覚悟の言葉であるように思います。言い方を変えれば、自己の努力や業績に根差した応報主義的価値判断から解放され、真摯に現実を受け止める姿勢であるように思います。それは、神すらも自分の都合で利用し、自己の正当化に躍起になる姿勢と、真っ向から対峙します。さらに、その姿勢は自己の支配が及ばない絶対者（自己と対なる関係性が成立しない者）を前に、徹底的に自己が相対化されることを含んでいます。この応報主義的価値観から解放された姿勢の内実をさらに探求していきます。

「共に」とは

「共に」との言葉に関して、あのパウロは神との親近性（近さ）と神の絶対性（超越）を考慮しつつ、二つのギリシア語を使い分けています。

一つは、「共に苦しむ」（ローマの信徒への手紙 八章一七節）、「共に生きる」（ローマの信徒への手紙 六章八節）、「キリストと共に復活させられた」（コロサイの信徒への手紙 二章一二節）等に用いられるように、存在あるいは行為の共同性を表示し、交わりの親密さを表象する「共に」があります。

もう一つは、「平和の源である神があなたがた一同と共におられるように」（ローマの信徒への手紙 一五章三三節）、「すべての人と平和に暮らしなさい」（ローマの信徒への手紙 一三章一八節）等で用いられるように、その間柄、関係性自体を表す言葉としての「共に」です。この後者の言葉が、マタイ伝承の「神は我々と共におられる」では用いられています。詳細の議論は専門家に委ねますが、共にある対象との差異により、パウロなりに「共に」という言葉を使い分けていたと推察できます。

先ほど紹介した山浦さんは、マタイによる福音書に描かれるヨセフ伝承の部分を次のように翻訳しています。

その名は《神共(かみとも)》すなわち、これは、「恐れ多くも神さまが我らと共におわします」との意(こころ)でござる(山浦玄嗣『ガリラヤのイエシュ』イー・ピックス出版二〇一一年)。

「神が我々と共にいる」ということを、山浦さんは「恐れ多い」ことであると解し、「神との親密性」ではなく、むしろ「神の絶対性」に注視しています。自分自身にとって都合の良いものと親しくある姿勢ではなく、自分自身の期待や予想を超えた、自分自身との関係が断絶する対象への畏敬の姿勢を読み解いています。

差異なるものと

さらに、「神と共に」という内実を探るため、哲学並びに聖書学者の宮本久雄さんの研究成果に触発され、「同化」と「差異化／異化」という言葉に注目します。「共に」との関係性を巡り、宮本さんは「共同体」という世界に対して、もう一つの「協働態」という表現を提案しています。宮本さんは二つの表現の違いを次のように説明します。「共同体」が、「共時的(自己)」、「自同の同」、「実体の体」から成り、「閉ざされた反歴史的な自己同一性」を表す表現であると指摘します。結果的に「共同体」は他者を同化し、共同体自体への絶対化(自己絶対化)を促すおそれがある。それに対して、異なるものが機能し合う協力の「協」、エネルギーの「働」、流動態の「態」から成る新造語である「協働態」は、異なる関係性の豊かさが育まれる場を拓いていると指摘します。それは、絶対他者を前提として、自己が相対化されることを導き、さらに、既存の自己理解が解体され、新たな自己発見が創出される関係性であることを読み解きます。宮本さんの思索に学ぶのであれば、「神と共に」とは神と一緒に同化している状態ではなく、神と差異化した関係性のなかにあることを示唆していることとなります。自分自身のコントロールの及ばない絶対他者(断絶している対象)との関係性の只中であってこそ、自分自身が見失っていた「新たな自己」の発見が始まります。

すなわち、「神と共に」とは、絶対的な超越者である神の前に自身の価値基準が解体されること、そして、自身の絶対性が破壊されることであります。同時に新たな自己へ拓かれていくことでもあります。少なくとも、自らが神の位置に立ち、神のように振る舞い、神に取って代わること(神の代理人となること)ではありません。あるいは、自らの理屈に合わせて神を利用することでもありません。聖書の伝承するヨセフの出来事は、まさに、ヨセフ自身を守る既存の世界観を打ち砕き、新たな世界の創出を願わにします。名門ダビデ家からの

脱落は、その脱落の只中で、ヨセフの歩みをマリアの悲しみに寄り添うものへと変えていきます。換言すれば、人間の側の応報主義に根差した価値判断が崩壊していく、その崩壊の只中にこそ、新たな自己の発見が創始することを聖書は宣言します。

終わりに

ついつい、私たちは自分自身を中心とした世界のなかだけに安住しようとしします。そして、自分自身の正しさのみに胡坐をかき、人を裁き、人を疎外します。私の計算に合うか否か、私の努力や働きに見合うか否か、私にとって大切であるか否か、私にとって意味があるか否か、私にとって必要であるか否かを判断します。あらゆることを自身の計算に合う形で処理できると考えています。そして、自分自身の納得する答えをひたすら求めています。先のメディアの人たちの言葉のなかに、その事実を裏づける根拠を垣間見ることができます。一方、自分自身の計算に合わせ現実に対しては、不安や恐れを抱きます。マリアの悲しみもヨセフの絶望も、そのような不条理の只中に噴出しました。しかし、聖書の世界は、計算に合わない世界へ私たちが巻き込まれることを通して、その絶望や悲嘆の只中で、今までの自分自身の手の中では計り知れない新たな自分自身に出会えることを指し示します。さらに、その都合の悪い出会いへ参与することを求めます。「恐れるな」と。そして、私自身の計算からの脱脚を求めます。それが、「インマヌエル、神共に」という世界です。

私という固有性・個別性が打ち砕かれ、解体されていく、さらに自己絶対性や自己正当性が打砕かれる、その只中に自分自身の計算に基づく歩みのなかで見落とし排除してきた世界が新たに立ち現れるのだと思います。そこに、異なる他者と共に歩む、新たな希望が創出します。それが、「神共に」と聖書が証言する真理でしょう。

最後にアドベントに寄せ、「待つ」ということを見つめてみようと思います。

「待つ」ということは、

自分自身の時間を他に明け渡すことでしょう。

それは、自身の都合や期待が解体されていくことを迎え入れること。

それは、自己に同化し得ない異なる他者へと拓けていること。

その只中にこそ、新たな喜びが立ち現れる。

今年も、一人ひとりが、絶対なる主の降誕をしっかりと待つ者でありたく思います。

二〇一一年十二月六日 火曜チャペル・アワー「アドベント讃美礼拝奨励」記録